

〈公募論文〉

実体の二つの意味について

『純粹理性批判』第一類推における実体概念の検討

 浜田 郷史

はじめに

本稿は、『純粹理性批判』(以下『批判』)の「原則の分析論」「経験の第一の類推」(以下第一類推)内部で、物質としての実体と個体としての諸実体とのジレンマを解決する試みである。実体は伝統的には独立自存するものとして存在論的に語られてきたが、認識論的にも重要な概念である。実体の持続との相関によって変化が認識できるからである。この意味で実体は、変化の認識という目的にかなう有用な概念だと特徴づけることもできよう。カントの実体概念にも伝統的意味に加えてこうした意味があり、このことが第一類推の整合的な解釈を困難にする一因になっている。

しかし、第一類推の整合的な解釈を妨げているもう一つの要因がある。それは、Hall 2011やHahmann 2009が指摘するように、カントが単数形の実体＝物質としての実体と複数形の実体＝個体としての実体を使い分けていることである。だがカントのテキストを見る限り、この二つの異なる実体概念は調和させることが難しいように見える。これが本稿の扱うジレンマである。

このジレンマに直面したHall 2011やHahmann 2009は、第一類推は物質としての実体のみを扱っていると主張している。すなわち、Hall 2011はこの問題の解決を第一類推内部では諦め、『オブスポストウムム』のエーテル論によってはじめて論じられると主張した。またHahmann 2009はジレンマを空間の無限分割性と絶対的に持続する単純な物質との接続という問題であると見極め、その活路を第三類推の空間および相互性カテゴリーに見出そうとした(Hahmann 2009: 136ff., 219)。だがこれらの研究は、「知覚の先取」に見られるようなカントの物質概念を等閑視し、結果として実体概念を適切に扱えていないように見える。

これに対して本稿では、第一類推で既に個体としての諸実体も主體的に論じられていることを示す。第一類推を分析することで、単数・複数のジレンマは絶対的持続と相対的持続という二つの持続概念の移行可能性に基づいて解決されるとわかる。これに伴い、本稿は実体について、二つの意味——絶対的に持続する物質と実際に存在する個体——を区別することになる。

議論は以下のように進む。1、2節でジレンマを説明し、先行研究を概観する。3節で、「知覚の先取」の物質概念を介してジレンマの解決可能性を示す。それを受けて4節では図式論や第一類推で行われる手続きを検討し、そこで改めてカテゴリーや図式と並置される個体的実体を、相対的持続として理解する。5節で、第一類推を分析し、二つの実体概念の体系的な連関を論じることで、ジレンマの解決を示す。最後に、カントの議論が、近代科学とアリストテレス以来の哲学的認識論の緊張の中にあると論じる。

1. 物質と個体

はじめにカントのテキストに沿って実体概念の問題の所在を明らかにする。実体は次のように述べられる。

或る哲学者が問われた。「煙の目方は幾らであるか」。彼は答えた。「燃焼した木の重さから残った灰の重さを引き去れば、煙の重さは得られる」。したがって彼は、以下のことを否定出来ないこととして前提しているのである。すなわち、火においてすら、物質(実体)は消滅することはなく、そうではなくその形のみが変容を受け入れるのだということである。(A185/B228)

この箇所ではカントは「物質」と「実体」をひとしく扱っているが、この実体概念には特異な点がある。後述するように、カントは通常、物質を外延量と内包量を持つ経験的対象と理解しており、第三類推での実体概念もこの通常の語法による。しかし、上記の引用文では、物質は、燃焼という変化にあって不変のまま持続する量(単数形の実体)とされているのである。

これを Hahmann 2009は、物質の絶対的持続、つまり永続をカントが述べていると断定し、「物質とはそもそも無規定なものなのか」と問う。そして物質の規定は『自然科学の形而上学的原理』によって与えられるとする(Hahmann 2009: 190-191)。確かに、物質に相当する物理的対象が何であるか(分子・原子・素粒子など)について、ここでカントは規定していない。

しかし、この Hahmann 2009の解釈には問題がある。引用の「物質(実体)」を相対的に持続する実体だと解釈する余地は残っているように思われる。というのも、「物質(実体)は消滅することはなく、そうではなくその形のみが変容を受け入れる」とあるが、これは、実体である限りの物質は変容する「形」と相関する対概念であり、そうでなければ意味を失うとも読めるからである。しかし仮にそうだとすると、「消滅することはない」という実体の特性には、特定の変化の認識に役立つ以上の何か積極的な意味はないということになり、Hahmann の読みと整合しない。

さらに Hahmann 2009の解釈は先程述べた第三類推の記述とも衝突する。第三類推において、カントは月や地球といった相対的にしか持続しない経験的事物を「あらゆる実体」(複数形)と呼んで、その「同時存在」を論じる(A211/B256)。すなわち、彼は同時存在の原則を諸実体の統一を論証するものとして見ている。すると引用文の煙や灰などの個体(=②)もまた実体なのではないだろうか。経験的対象に対するカテゴリーの適用は、実際には、時空間に単一に存在する実体ではなく、「あらゆる実体の相互性」(A218, B265 Anm.)をもたらすものでなくてはならない。月と地球はやはりそれぞれにおいて実体であろう。歴史的研究によれば、カントは、ヴォルフ派の影響から、諸実体からなる「世界全体の統一」(ebd.)として第三類推を構想している(cf. 増山2015: 151ff.)。

以上のように、テキスト上の実体概念はさしあたり多義的である。そこで、以下では①一切の変化に関わりなく永続する物質としての実体と、②経験的対象としての個体という、二つの実体理解を論じる。両者はいずれもテキスト上の根拠を持っているが、どのように関連するのだろうか。

2. 二つの概念の両立不可能性

①絶対的に持続する物質としての実体と②個体としての諸実体の概念は相互に排他的である。本節では、このジレンマを解くための鍵は、持続の意味にあると論じる。

カントは一方で物質の量が不変であることを論じている。個体(たとえば木)は消滅するが、実体は生成消滅することなく持続する。それゆえ、この解釈によれば、経験的に変化し、その形とともに消滅する個体は実体性のカテゴリーに属さないこととなる。他方で、第三類推では個体こそが実体と呼ばれ、物質と区別されている。ここでは逆に物質が実体性のカテゴリーに属さないように思われる。これがジレンマである。

まず最初に、このジレンマは相対的持続の概念のみによっては解決の見込みが薄いことを述べる。実体には、持続するものが背後にあることで変化が記述できるという、対概念としての用法があるのではないか、と先に論じた。仮に実体の意味がこの点に尽きているならば、実体とは文脈に応じてその指示対象を変える概念であってよいはずだ。その都度それぞれのテキスト上で実体の意味を物質または個体に同定すればジレンマは解決すると、一見すると考えられる。

例えば、Addis 1963は、「実体-偶有の様式において世界を見る」(Addis 1963: 237)には、「持続的(少なくとも相対的に持続的)な何か他のものを仮定するしかない」(ebd. 240)とする。カントは実体概念によって、単に我々のこうした世界の見方を問題としているだけなのかもしれない。煙や木が生成消滅する場合、不変の量として「物質」が否応なく「仮定」されるが、そのことは、個体としての実体を主張する諸テキストと矛盾しない。煙や木もまた別の文脈においては、持続するものと「仮定」することができる(煙が形を変える、木が変色するなど)。よって実体は、特定の対象を意味するのではないと考えられる。

しかし、このような機能主義的解釈にも問題がある。①の意味では、物質はあらゆる変化にもかかわらず持続するものであり、或る何らかの変化にもかかわらず持続するものではない。「形」を持たない物質の概念は「形」に相関する相対的持続の概念とは異なる。ところがAddis 1963の立場では、「我々は裸の物質を見ることはない。我々は物質が木や家などに形作られているのを見る」(ebd. 242)ということになるので、そのように比較を絶した絶対的持続は維持し得ない概念であることが判明するのである。Addis自身は、物理学の基礎付けという側面を強調し、個体を、絶対的に持続する「物質の断片」であるとも言おうとしているが(ebd. 242)、「裸の物質」を見ることはできないのだから、この擁護は成功していない。第二に、カントは純粹悟性概念がその使用において直接に知られるという認識論ではなく、それが図式の媒介において知られるという認識論を持っている。そこでは、カテゴリーの「経験的使用」としての相対的持続はそれのみで理解されることはできず、時空間に位置を占める経験的対象としての実体が必要である(後述する)。

絶対的持続を支持する証拠は他にもある。他方、経験的対象としての個体は通常、生成消滅するという特性とともに理解されるため、絶対的持続として実体が持つはずの権利を否定される。こうして、ジレンマの解決は自ずと個体の絶対的持続の可能性を中心とするものになる。解決に関わる三つの論点を挙げておく。

議論1 経験の唯一性 Hahmann 2009は第一類推で論じられる実体の唯一性を強調しつつ、これを、経験の唯一性、物質としての永続性、判断の究極的な主語になるという論理的性質に結

びつけて論じた(Hahmann 2009: 186ff.)。単数形の実体の絶対的持続は、これら三つの実体の意義と深く関連している。

特に経験の唯一性との関わりは重要である。実際、①を否定し、②の如き個人的な経験の対象がそれぞれにおいて実体であるとするならば、物質と実体を同義とする上記引用と明らかに辻褃が合わなくなるだけでなく、なぜ種々の実体が単一の時間・空間において経験的統一を持ちうるかがわからなくなる。Guyer 1987は、第一類推の目的は、経験的事物の流動にも関わらず、そもそもいかにして世界が継起と同時という関係を持つのかについての一般的な条件を与えることだと正当にも指摘している(Guyer 1987: 219)。相対的持続性を初めから前提してしまうと、このような超越論哲学の基本的な問題構制を見失うおそれがある。世界の持続性はそもそも問題なのであり、その答えとなるのが Hahmann 2009の言う、実体と経験の唯一性との関連である。Hall 2011が主張したように、この統一には相対的持続では不十分で、あらゆる変化にも関わらず持続する実体のみがこの問題を解決する(Hall 2011: 83)。

議論2 時間の基体 カントは同時存在や継起がそれについて表現される場所の「時間そのもの」、すなわち「持続」が経験の条件となるとしている。そしてその際の持続性とは、もはや生成消滅に応じて持続するものではなくして、「あらゆる時間規定の基体」としての「持続的なもの」である(A183/B226)。この「持続的なもの」とは、実質的には①に他ならない。だがそうすると、木や煙は実体とみなすことはできない。それらの経験的对象は実体ではなく、実体=基体に付随する単なる「規定」であるということになる。

二つの持続概念を軸として議論を整理し直すと、①絶対的に持続する物質が②個体と対立するのは、前者が直ちに複数性の否定を含意する点ではなく、実は②個体を、非絶対的な、それ自体生成消滅するような実体——このような個体は、相対的な持続のみを許容する——と見ているからだということがわかる。換言すれば、議論1や2は、経験や時間の唯一性などに基づいて実体は複数ではなく唯一であるとする決定的な証拠を示しているというよりは、絶対的持続が経験世界における変化を認識するために不可欠の役割を果たすことを示しているというべきである。したがって、個体が絶対的に持続する場合、①②のジレンマは解決する。

議論3 カントは原子論に与していない。ここで重要と思われるのがカントのライブニッツ批判である。生成消滅する実体という概念の否定の後に実体の複数性を認めようとするれば、モノ論や原子論が魅力的な選択肢となる。これらは或る意味で個体の永続性の主張だからである。しかしカントはライブニッツの予定調和を否定して、「世界」を、或る実体が他の実体と外的(相互的)関係を含み持つこととして捉えている。仮に個体としての実体が絶対的持続を持つとしても、実体の内的規定の分析からは直接に「世界全体の統一」における同時存在や継起の意味は与えられない。Watkins 1997 や Longuenesse 2005など、第一類推とは異なる第三類推の意義を強調している研究には一定の蓄積がある。

以上から、複数の個体の同時存在や継起を唯一の実体の「時間規定」として理解する第一類推と、個体を「あらゆる実体」として表現する第三類推とを、深刻な矛盾ではなく二重の見方として理解する可能性が示されている。この改良された議論に従えば、諸個体と物質のジレンマは、実体の絶対的持続に基づいて調停できるのである。上述の研究も、議論1や2に示された物質の絶対的持続を基礎にした上で、議論3を踏まえ、その相互性(Watkins 1997: 415ff.)や空間規定(Longuenesse 2005: 197ff.)などに“個体化の原理”を模索する¹。特に使い分けが顕著な第三類

推では、物質が遍在することが、個々の天体の同時存在を示す根拠として用いられている(A213/B260)。ここでは、①物質(として遍在する実体)と②実体(複数存在する個体としての実体)とが区別される。上の研究ではこの区別を支えているのが絶対的持続であると考えられることになる。

この議論によれば、物質は一義的に絶対的に持続するものである。他方、個々の経験の対象は両義的であり、相互性を持つ諸実体であると同時に絶対的に持続する物質の単なる規定(Addisの言う「断片」)でもある。この立場では、経験の対象は生成消滅するが、それら自体が実体として生成したり消滅するとは言えない。もちろん物質も生成消滅しない。木が変色する(形を変える)ことの対概念として木を実体と見ても良いのだが、木が灰になる(消滅する)ときには、これを実体の消滅と見るのではなく、あくまで背後にある物質の変化としなければならないのである。しかし、物質の持続に議論1や2を支えると同時に相対的持続を兼ねさせる点に問題がある。本稿の特徴づけでは、絶対的持続は変化を可能にする根拠であり、変化の基準ではない。この二様の意味が、実体の理解を曖昧にしている。

Hahmann 2009も物質の消滅があり得ないのか疑問を提示している(Hahmann 2009: 127)ように、そもそも物質の持続は非絶対的ではないかとも考えられる。そして、単数・複数のジレンマは、この曖昧さとは独立の問題である。こうしたスタンスを取りながら、本稿は改めてジレンマの解決を試みる。先取りすると、まず「知覚の先取」を検討する。持続に集中してジレンマを解決するのではなく、持続とは異なった概念枠組、つまり空間(=物質)の無限分割性と因果性を持つ質点の両立可能性として、①②を調停する。

第一類推でむしろ問題となるのは、曖昧さを引き起こす本来の理由、すなわち、持続の意味がもともと二種あるということである。煙や木は、その「形」に対して基準的で相対的に持続するという意味で実体ではあるものの、物質量という意味で絶対的に持続するものではない。経験的对象は、何らかの転変をその変化と見なしたり相互に比較するための基準として役立つが、ただ相対的に持続する。他方、形を持つこれらの諸実体の質量の総和が物質量となるので、形を持たず絶対的に持続する物質としての単数形の実体の存在を想定する必要は必ずしもない。今のところ絶対的持続としての物質概念は、生成消滅を超越する相対的持続の使用を統制する限界概念として機能するだけである。以上のように、相対的持続と絶対的持続との関係を軸として、①②の連関を示すことができるかもしれない。

本稿はこの方針のもとで実体概念を解釈する試みである。だが、物質と実体が互換的に論じられる第一類推の文脈の整理や第三類推との比較のみでは、カントの実体概念が単に混乱しているのではなく、或る統一的なプロジェクトに沿って分節化されていると示すには不十分である。ここではじめに、物質が「知覚の先取」の实在性(量)カテゴリーにも関わると示す。

1 Watkins 1997は第三類推独自の意義を考え、二つ以上の諸実体の間の「現実的」な双方向の因果関係が同時性の根拠となると論じることで、第一類推のみならず、第二類推における「出来事」の因果的連結との差異化をも図っている(Watkins 1997: 441)。本稿も、実体という主題が第三類推に継続すると見なす点でWatkinsに大筋同意する。また、Longuenesse 2005は判断表からカントの相互性概念の解明に取り組み、またライブニッツ批判を踏まえて、第三類推における相互性が悟性と感性との協働による合成であり、そしてこれがまさに通常の知覚が対象を一つの空間の内に認識するのと同じ能力であることを強調した。Longuenesseの見解は永続的な物質概念と日常的な物体の判断を両立させようとし、根本動機の上で本稿の立場と重なるが、カントの物質概念について、「偶有的な属性は変化する一方で本質的な属性は持続する」(Longuenesse 2005: 197)と理解している点で大きく異なる。

3. 「知覚の先取」における物質の概念

周知のように、「知覚の先取」は熱などの感覚が内包量という量を持つことを示した議論である。しかし、この内包量をめぐる議論はカントの物質論にも密接に関連している。実際、「知覚の先取」でカントは非原子論的な物質論を展開している。そこで本節では、カントが批判した原子論を規定した上で、「知覚の先取」の物質論の内実と意義を明らかにしたい。

もともと原子論は、形を持った事物を解体し、空虚および様々な原子の組み合わせによって説明するものである。この原子論に対するカントの反論は、さしあたって、非経験的な仮定が多すぎるといえるものである。物質には膨張・収縮などの量的相違が生じるが、そのことについて、「空間における実在的なものはどこでも均一」(A173/B216)で「空虚な空間を認める他ない」(ebd.)という原子論の主張は誤りである²。こうした原子論の「前提の仮定的な必然性を廃棄し、もし自然研究がこのことについての仮説が必要だとしても、少なくとも悟性を解放して別の仕方でもこの相違を考える」(ebd.)ことは、可能である。

原子論の「仮定」とは、(1)原子の量が問題であり、原子自体は均一であるという仮定、(2)空虚な空間が存在するという仮定である。カントは(2)を、(1)を仮定せずとも量的相違が可能であること、すなわち、実在的なものの「度」という概念を導入することによって間接的に論駁している。

歴史を振り返るなら、古代の原子論では、原子は生ける種子とされ、それぞれの原子の固有性から、因果的効果が生じる。特定の形状の原子は、それぞれ甘い、苦いなどの感覚的性質を惹起する。このように、古代の原子論は、各々異なった質を持つ原子、その因果的作用、空虚な空間を認める。それゆえ、これは一種の多元論と言うべきであって、カントの当該の批判に当たらないように見える。

カントが「ほとんどすべての自然科学者」に見いだした新しいタイプの原子論は、上記に対して二元論的な立場といえる。すなわちそれは、同質の原子と均質な空隙との比率によって、状態の変化を説明する学説である。この意味における原子論は、個々の原子の性質に基づかずに感覚上の質的違いが記述可能となる点に強みがある。例えば、それぞれの延長の性質(熱さ等)の違いも、空虚と原子の比率にのみ依存して説明できる。

「知覚の先取」では、後者の原子論者に抗して、カントは、物質になんらかの特殊性、すなわち、内包量を考えている。そのように理解するかぎり、稠密な延長が、しかも各々異なった「質」(=「度」)を持つことになるため、原子論が仮定する「空虚な空間」を導入する必要がなくなる。「等しい幾つもの空間が違った物質によって、そのどれにおいても物質の現存していない点がないよう完全に充たされているにも関わらず、すべての実在的なものは同質であって、その度(抵抗あるいは重さの)を持っており、この度は…無限に小さくなりうるものである」(A174/B216)。カント

2 嶋崎2014はモノド論批判の文脈でカントの「現象的実体」を論じているが、その文脈に『物理的モノド論』を論じたかつてのカント自身も含めることに同意している。本稿では「ほとんどの自然科学者」「均一」というカントの表現から、批判対象をモノド論よりもむしろ原子論に見定める。というのもモノド論の場合、不可識別者同一の原理によって質的に同質な複数の個体は存在し得ないはずだからだ。むしろ、モノド論と原子論の概念的差異をこのように置くべきかは論者によって異なるゆえに、このことから直ちにこの箇所でのモノド論批判の妥当性がなくなるわけではない。

はここで、比重や熱といった感覚的差異を根拠に「違った物質」と捉えられる場合でも、「度」の異なる同質の物質によって構成されていることがありうるとした上で、そのことが空虚な空間を認めなくとも説明可能であると論じているのである。以上のようにして、膨張や熱などの変化は、空虚な空間と原子をモデルに考察される必要がなくなるのである。

だが、カントの内包量の議論の卓越性はこのままでは明らかでない。空間中の原子の量が異なれば因果的に異なった感覚的作用をもたらし、それぞれ異なる「度」が帰結すると考えることもできる。特定の原子があれば苦みをもたらし、苦みは原子の量が増えることでますます増大する。同様の関係が熱や比重についても言いうるではないか。感覚は空間中の物質の量に相関するということは、原子論によって全く整合的に説明できるように思われる。不必要な仮定が多すぎる理論はそれだけで誤りであるとは言えない上、カント自身の所論と区別がつかないのは問題である。

実際には原子論に対する反論を踏まえてカントは「物質」概念の実質的な意義を明らかにするという課題にも取り組んでいる。重要な点は、カントの内包量は、因果関係を含まない点である。Jankowiak 2013も、この論証が因果的に行われるとする解釈を批判して、数学的に構成されると主張した。Jankowiak によって否定される、因果的解釈(C)を単純化すると次のようになる。

(C1) 感覚は内包量を持つ。

(C2) 感覚の内包量は、他の内包量によってのみ引き起こされうる。

(C3) 現象における実在は、感覚の原因である。したがって、現象における実在は内包量を持つ。

しかし、C2は誤りである。例えば目で感じられる光の強さは、光源の「内包量」以外の量と相関しているかもしれない。光源の「内包量」と距離の関数であるかもしれないし、或いは単に距離のみに比例するかもしれないからである。更に C3にも問題がある。万一 C3が論証されたとしても、因果関係は目下の課題と無関係であるとカントは「知覚の先取」ではっきり断っている。「因果性について私は今は問題にしない」(A169/B210)。従って、C3は無効なのである。これに対して Jankowiak は、彼が感覚構成解釈(SC)と呼ぶ別の解釈を提示している。

(SC1) 感覚(具体的にはその質)は内包量を持つ。

(SC2) 直観を構成する感覚の質は、直観によって表現される質と同一である。

(SC3) 直観によって表される質は、現象における実在と同一である。したがって、現象における実在は内包量を持つ。

このように、感覚は空間的形態と総合されて対象の直観を構成する。定性的な性質として感覚的に表現される実在は、直観を通じて表現される内包量と同一なのである。この解釈によって明らかになるように、現象における実在性の度は、因果性のカテゴリーを必要としないものである。

それゆえ、外延量・内包量を持つ対象が「物質」であるにふさわしい条件を満たしている。原子論者は、空虚な空間のみならず、ニガヨモギの原子は苦味を“惹起する”と考えている点でも誤りであり、この感覚的な内包量は数学的に構成されることが可能な連続的な度である。

とはいえ物質は数学的構造以上の何か(現存在)であって、通常は因果性が適用されることにも注意せねばならない。例えば、カントによれば運動量という概念は因果性ととも論じられる内包量である(A169/B210)。しかしそれでも、原則的分析においては、物質概念の基本的条件は以上に尽きている。すなわち物質概念は内包量と外延量によって「構成」されるのであり、従って物質概念の意義は、「経験の類推」ではなく、むしろ「知覚の先取」において骨格を示されたものと見て良いだろう。

以上やや詳しく「知覚の先取」における物質概念を論じた。カントは新古の原子論いずれに対しても異なった物質概念を基礎づけた。このように、物質はまずは実在性(質)のカテゴリーにかかわる。

「知覚の先取」で空虚な空間を否定した一方、「第二類推」で作用や力の概念が導入され、これは「実体の概念を導く」(A204/B249)。ここでは、カントは具体的には質的に同質の空間的延長が力学的には質点とみなせるといふ議論を念頭に置き、個の実体と物質を統一的に理解している。物質を因果性や実体以前に実在性とみなし、二段階で把握しておくことによって、運動や変化を記述する際に原子のような対応物が存在すると想定する必要はなくなり、空間(=物質)の無限分割可能性と諸実体(=質点)は矛盾しないこととなる。つまり、「知覚の先取」で内包量で定義される物質に因果性という“個体化の原理”を認めることで①②のジレンマの解決が導かれるのである。物質は実体とも諸実体とも見なしうる。第一類推はより基礎的な問題、すなわち(諸)実体の[・]実[・]体[・]たる所以に取り組む。

以下で見るように、物質が実体であるには、実体性のカテゴリーが運動などの「実在的なもの」を「偶有」と規定する(A186/B229)という手続きを踏まえる必要がある。先取りして言えば、実体と物質が互換的となるのは、第一類推の議論を通じて、「偶有」が主語としての実体の[・]本[・]質[・]と見なされた場合に他ならない。この場合、「火においてすら…変容しない」と目された実体もまた経験的対象である。しかし、この対象としての実体概念は、対象の可能の条件であるカテゴリーや図式と区別される必要がある。そこで次にこの問題をより詳細に論じる。

4. 実体、実体性のカテゴリー、図式の区別

第1節で見たように、カントは物質と実体という言葉は区別なく用いている。しかし、前節までで明らかにしたように、両概念は厳密には内包が異なる。物質と実体は、密接に関わってはいらなくても、それぞれ異なった意味ないし体系的位置を持つのである。

本節では、対象としての「実体 Substanz」と、「実体性 Subsistenz のカテゴリー」、ならびに「実体性の図式」をカントがどのように区別していたのかを確認する。本節で、この三者を一般的に整理し、次節で第一類推でのそれらの概念の意味を分析する。

カントにとって、直観のない概念は空虚である。カテゴリーも概念である以上、それ自体として意味を持つものではない。だが、概念が直観によって有意味化するとはどういうことだろうか。この表現は、超越論的な反省が有意な判断からその要素へ遡行する際に与えられたものであるとみなせる。すなわち、空虚とは、超越論的な反省において両者が二つの能力に分別された限りのことであり、このことは逆に、経験においては概念は有意味であることを前提しているのである。このようなことは、概念が「使用」において意味を持つというカントの考え(A84/B117f.)のうちにすでに含まれていた。

しかし、批判は、このように使用のうちに織りなされている認識構造を明るみに出し、実体を実体性のカテゴリーの適用として単純に了解することは[・]でき[・]ない[・]ことを示している。認識を概念と直観の総合と見なすには条件があるのだ。ここで論点としたいのは、図式機能の介在である。カントによれば、我々は「原則そのものにおいてカテゴリーを使用する」のであり、その際、カテ

ゴリーは「いかなる感性的条件によっても制約されない」(A181/B224)。しかしながら、原則の現象への適用においては、図式はカテゴリーに「並立」し、「カテゴリーを制限する」(ebd.)。このように、カントは図式を中間項とすることにより、一方で悟性の無制約性が堅持されながら、他方で悟性と感性は相互制約的になっているという、複雑な連関を見出したのである。Hahmann 2009も指摘するように、カテゴリー(判断における主語)と図式(持続性)はいずれも実体認識のために必要である(Hahmann 2009: 119, 182)。

しかし、Hahmann も言うように(ebd. 166)、図式は時間一般の超越論的な規定を表現するもので、特定の対象のいわば背後へ超越していくため、それ自体を対象的に把握できない。つまり、実体性に完全に対応する「持続するもの」を経験において直接に(Addis の表現で言えば)「見る」ことはできない。カテゴリーの無制約性に関わらず、カテゴリーを媒介する実体性の図式は、単なる「関係」である。従って、経験においては必ずしもカテゴリーに完全に対応しない実体の偶然的な現存在がそのつど前提されなければならない。この点で、原則論では、カテゴリーをいわば内側から拘束し制限するものとしての個の実体の問題が改めて前面に出てきているのではないだろうか。というのも、この連関に基づく限り、対象という意味での実体概念をみだすのは、②個体のみであるからである。個体のみが、生成消滅しうる。——だが、前述したようにカントが物質を実体と呼び、そして実体が今、経験の対象すなわち個体を意味するのならば、まさにこのことは、①を②と見なすと言っているに等しい。ジレンマは既に解決されている筈だ、ということになるのである³。しかし、それはいかにして可能なのか。

そこで、第一類推において、この解決を見ていくこととしたい。

5. 実体とは何か

以下、カントが実体概念を二つの意味の移行として表現していたことを明らかにするとともに、この移行によって、相対的持続と絶対的持続とが接続する場面を見届ける。議論の流れを簡単に説明すると次のようになる。まず、第一類推でのカントの論証の目的を示す。次いでその論証の基本形式を定式化する。ここで、前提と結論における実体が概念的に相違していることを、とくに「偶有」に着目しながら示す。これにより、①②の実体の概念的相違を、経験から超越論的な反省への移行として理解できるようになる。先取りして言えば、経験的に記述される個の実体と、当の経験的認識を可能にする認識機能との区別として、相対的持続と絶対的持続が明確に区分されるのである。最後に、後者が経験的記述に誤って持ち込まれた場合に関して、第一類推の認識批判としての側面についても述べる。個体は、経験の対象であると同時に、誤った実体理解を暴露する批判原理としても理解される。

まず論証の目的について述べよう。カントは、第一類推の最終段落において成果を次のようにまとめる。「持続性は、現象がそのもとでのみ物あるいは対象として可能的な経験において規定されるための必然的な条件である…この必然的な持続性の経験的試金石、またそれとともに、諸

3 物質を経験的对象と見ない立場もありうる。しかしこの時には図式の個体を超越する持続性(Beharrlichkeit)と、絶対的に存在する物質(das Beharrliche)との間にジレンマが残る。本稿の立場ではこの問題に立ち入らずにジレンマを解決しうる。

現象の実体的性質 Substantialität の経験的試金石が何であるかについては、あとに述べる」(A189/B232)。このように、実体性のカテゴリーが図式に媒介されて「持続性」と「諸現象の実体的性質」という二つの性質をもち、これが経験を可能にしていることを論証するのが第一類推の目的である。「持続性」とあるのは、時間自体を表象する機能に関わっており、「諸現象の実体的性質」とあるのは、変化を表象する基体の機能に関わっている。いずれも認識一般のための機能に尽きている。先取りしておくならば、カントは、こうした認識機能に個の実体が常に前提されていると考えているが、にも関わらず、実体性のカテゴリーに厳密に対応する「持続するもの」が存在するかどうかについては「経験的試金石」に委ね、第一類推では判断を保留している。第二類推でも、「作用」や「力」がその主体の「実体性を証明する十分な経験的基準となる」(B251)と言われる。このように、実体性のカテゴリーに対応する実体の発見は経験的問題である。

それでは、こうした経験的に見出される性質について語らないままで、第一類推は実体をどのように語るのか。以下このことを述べていきたい。まず、上述の二種の認識機能が、実際には同一の関係性にまとめられることを見、次にこの関係性において、常に個の実体が前提されていることを述べる。

第一類推における「仕方」という言葉に注目するならば、それが二回、異なった文脈において使用されることがわかる。

現象の多様に対する我々の把握は常に継起的でありそれゆえ絶えず変易する。それゆえ、常に存在しているもの、つまり何らかの留まるもの、持続的なものが根底になかったとすれば、我々は、この多様を、経験の対象として同時あるいは継起的なのかを、決定できない。そしてあらゆる変易や同時存在は、その持続的なものが実際に存在する仕方(Arten, ... wie das Beharrliche existirt)にはほかならないのである。従ってこの持続的なものにおいてのみ時間関係は可能であり、…だから持続的なものは時間そのものの経験的な表象の基体である…。(A182-183/B225-226)

或る実体が実際に存在する特殊な仕方以外の何物でもないような実体の諸規定を、偶有と呼ぶ。…人が実体に関してこの実在的なものに(例えば物質の偶有としての運動に)或る特別な現存在を付加するならば、この現存在を実体の現存在と区別して内属と名付け、実体の現存在を実体性 Subsistenz と名付けることになる。(A186/B229-230)

この二つの引用では、「持続的なもの」と対になって「実際に存在する仕方」、「実体」と対になって「実際に存在する仕方」と、二つの文脈において「仕方」が言及されている。最初の引用では、「持続的なもの」が、時間自体を表示する機能とされ、次の引用では、「実体」が「物質」や「実体性」などと言い換えられている。

以上の二つの文脈は第一類推の論証目的である「持続性」と「諸現象の実体的性質」という表現に対応している。つまりカントは第一類推において、時間表象と諸現象を包括する実体性という異なる二つの文脈に対して、「実体」(ないし持続的なもの)とその「実際に存在する仕方」という同一の関係性を見ていたのである。

そこで次に、この関係性に着目して、議論をより詳しく見てみることにする。直前の引用箇所

に続く文である。

しかしこのこと〔内属、実体性と名付けたこと〕から多くの誤解が生じるので、もし人が偶有を、或る実体の現存在が肯定的に規定される仕方としてのみ表現すれば、よりの確かかつ適切である。にも関わらず、やはり我々の悟性の論理的使用の条件により不可避免的なのは、実体の現存在における変易しうるものを、実体が持続するにも関わらず、いわば分離して、本来的な持続的で根底にあるものとの関連で考察することである。(A186-187/B230)

ここで重要と思われるのは、カントが変わりうるものを「実体」から「分離」し、改めて「本来的な持続的で根底にあるもの」と関連付けている、という点である。この一見迂遠な手続きによってカントが述べるところを考察しよう。結論から言えば、この箇所は次のように解釈できるだろう。「悟性の論理的使用の条件」による「分離」とは、主語と述語の区別に基づいて、実体とその存在の仕方としての諸規定という関係から、実体性と内属という関係へ、さらには「本来的な…根底にあるもの」とその規定へと移行することである、と。

以下、このことを見ていく。カントの述べる悟性の使用をまとめると次のようになる。

第一に、実在的なものを実体との関連に置いて、持続するものを実体、変わりうるものを属性として切り離す。

第二に、属性を「本来的な…」基体との関連に置く。

第三に、この「本来的な…」基体を実体とみなす。

カントは他の箇所でも、判断における主語-述語関係、実体、そして基体-変化関係を、「生起するものの究極の主語…あらゆる変易しうるものの究極の基体の実体だ」(A205/B250)とあるように、連関させている。問題は、第一の実体と、第三の「本来的な…」基体や「究極の主語」などが果たして同じものの単なる言い換えなのかということである。

「本来的」については後に述べることとし、先に分離以前の実体について述べることにする⁴。分離以前にある実体の存在の仕方は、実体の存在を「肯定」するものとして捉えられている⁵。この実体とその存在の仕方としての諸規定という関係は、主語と述語で論理的に把握されるすべての時空的対象に妥当すると考えられる。例を用いて考察しよう。或る物体が運動するとする。このとき、物体は運動という仕方で「実際に存在する」。そして物体が運動しなくなったとしても、その物体の存在が消えてなくなったわけではないから、運動は偶有に過ぎないと言える。だが同様にして物体が物体としての活動と他の事物との関わりを一切やめる時、それは存在していると言えるだろうか。この問いに否定的に回答する者は、むしろ偶有こそが実体を「肯定的に規定する仕方」であるというカントの表現に近づいているであろう。実体はその内的な存在可能性ではなく、むしろその偶有において初めて有なのである。言い換えれば、実体は他の諸実体と相互関

4 Hahmann 2009は実体概念のこの移行を見逃している。すると彼があらゆる変化の主語・基体、つまり絶対的持続に至らざるを得ないのは自然なことである(Hahmann 2009: 166)。最終的に彼は実体性の図式は矛盾していると結論してしまう(ebd. 185)。

5 「肯定」とあるのは、否定的述語も本質とする場合、概念規定が爆発的に増加してしまうからである。カントはこれを「誤解」と述べている。肯定・否定の二項関係を個体記述の基礎に置くこの見方は、基本的にヴォルフ派の系譜をひいているとみられるが、ここではこれ以上展開できない。

係にあり(ゆえに個的であり)、消滅する可能性を蔵している時にのみ、「現存在」である。またこのような現存在の偶有性を切り離して、形を持たず運動しないままの実体——絶対的に内的なものとして孤立した実体——は、ここでは考慮されていないのである。第三類推で詳述される、相互的な「あらゆる実体」だけが「実際に存在する」ことが、この「仕方」の把握に現れている。そしてこのような実体は本質的に永続し得ない。

このように、カントは、第三類推のみならず第一類推においても、「形」ある有限な個体に依拠しながら実体性のカテゴリーの適用を理解しているのではないか。実体としての物質は、運動という仕方、他の実体に触れ、他者と因果的に相互関連しながら「実際に存在する」のである⁶。この「現存在」する実体に対して、「分離」が加えられることにより、初めて「実体性」も見出される。こうして、諸現象を包括する実体的性質＝実体性が導かれるのではないか。

しかし、物質の絶対的持続や実体性のカテゴリーは、この個的な実体とどのように折り合うのか。ジレンマはより深いものとなったのではないか。そうした疑問は、カントが感性論で行った「分離 *absondern*」の手続きをここでも想定することで解消されると思われる。そこでカントは物体の表象から感覚に属するものや悟性に属するものを「分離」(A21/B35)し、純粹直観ないしは単なる形式としての空間を得る。空間は対象の形式であるが、対象と同じ意味で存在しているとはいえない。同じようにカントは、絶対的持続を対象の性質ではなく、対象の形式として提示しようとしたのではないか。

以上を念頭に置いて、次に「本来的」実体に関するカントの議論を追ってみよう。カントによれば、「本来的」実体＝基体に対して、生起や消滅はありえない。このような「本来的」実体が生起し、他の実体が消滅するということは、「笑うべきものである」(A189/B232)。この唯一の実体は当然①である。「あらゆる現象の実体的性質」についての議論は、実体とその実際に存在する仕方の関係によって制約されつつも、そのような判断規定を超えて、「本来的」実体と「その規定」へ移行している。カントが「本来的」実体を物質、実体性とも呼ぶのは、基体としての物質の絶対的持続が現象の超越論的条件であり、カテゴリーを正確に反映したものであるからに他ならない。

「時間の持続性」についても、同様に移行がみられる。時間は知覚されないため、時間の量を考えるためには何らかの持続的なものが必要とされる。「無から何も生じないという原則も、持続性の原則、或いは、諸現象における本来的な主体が現象において永続的に現存在することの原則からの別の帰結にすぎないのである。現象において、人が実体と名付けようと思うものは、全ての時間規定の本来的な基体であるべきだとすれば、過去におけると将来におけるに関わらず、あらゆる現存在はこの基体によってのみ規定されるのでなければならない」(A185/B228)。このように、分離された「本来的」実体は単なる抽象物ではなく、「実際に存在する」実体——時空における物理的実在として概念化される個的な実体——がそのように概念化される以前から、またそのこととは独立して理解されるものである。将来や過去がそうしたものとして規定されるためには、このような実体が必要である。

こうした移行の要たる「分離」については、次のような批判が成り立つことも指摘しておこう。「人は歩くものである」「物質は運動する」等々の判断においては、実体と偶有の関係は主語と述語

6 「知覚の先取」で構成された運動量についても、経験的には因果性を持たねばならないとされていたことを想起されたい。カントが運動量を、他の事物に対して働きかける力と解していたことについては、犬竹2019参照。ただし第一類推が特定の力学理論に限定されるべきだとは考えない。

の結合と理解され、同時に「歩く」「運動する」などの属性は主体に内属すると理解される(この主体とは基体という意味)。以上の実体=主語=主体(その背後での偶有=述語=属性)の論理には、いわば現象の知性化によって偶有の存在性格が漸次目減りする側面がある。ここで、もし実体と「本来的な…」基体を同一視すると、あたかも「本来的」実体=物質=内的本質だけが存在することになる。正しく理解するならば、実体性のカテゴリーに対応する基体・物質としての実体は、経験的に見出される個体とは異なったものである。その混同は、経験を可能にする超越論的な形式を時空間上に実在する対象と見なしてしまう、という誤謬に他ならない。

物質としての実体は超越論的な主観が持つ認識機能であり、同時存在や継起といった時間表象を可能にすることで個体的実体の経験を可能にする。認識機能として実体は、「過去、現在、未来を通じて、常に存在する」ものであり、「未来に関係する…内的必然性」であるとともに、「つねに存在した、という必然性と離れがたく結合している」。この絶対性なしには先後関係すら成り立たない(表象できない)のでいかなる基準も意味をなさず、変化も記述できない。しかし、「この持続性はやはり、我々が物の現存在(現象における)を表象する仕方」、経験を可能にする認識機能以上のものではない(以上 A185-6/B228-9)。

私の見るところ、経験における「現存在」と「仕方」との緊密な関係と、その絶対的持続への移行こそが、第一類推の根幹である。カントの目下の関心は、偶有を通じてはじめて実際に存在する経験の対象⁷から絶対的持続性を取り出すことにある。その際にカントは、絶対的持続性だけを持続性の意味とするような議論を、取えてしなかった。基体としての物質がそこから取り出されるところの「実際に存在する」実体は、そのつど知覚される対象であり、変化に相対的に持続する個体的実体である。木や人間、月や天体もまた実体なのである。「変易しあるいは変易しうるものは、実体あるいは諸実体が実際に存在する仕方に属している」(A183-184/B227)。この箇所ではカントは、実体と諸実体を並行して述べつつ、実体と「仕方」との緊密な関係に基づいてはじめて変化を規定しうることを示唆している。第一類推に実体の唯一性のみを見る解釈にとってこの箇所は単に「例外」である(Hahmann 2009: 124)。しかしこの箇所こそカントが第一類推で既にジレンマを解いている証拠である。

まとめ——ニュートン力学と近代哲学の緊張としてのカント

本稿は物質としての実体と個体としての諸実体のジレンマの解決を目的とした。まず「知覚の先取」を介して、空間(延長)の無限分割可能性と質点としての実体概念とを調停した。次いで第一類推の分析によって、個体から本来的な実体への移行を析出し、実体の両義性を、相対的に持続する実体から認識機能としての絶対的持続性への移行として捉えることに成功した。最後にこの点から明らかとなるカントの実体概念の射程を示して稿を閉じたい。

カントは第一類推において、絶対的持続の概念を通じて力学の基礎概念を整備した。しかし、

7 傍証として、1789～1791年頃のものとして推定されるカントの講義録『シェーン形而上学』を挙げることができる。そこでカントは、自我という「実体的性質」を例に、「思惟の中であらゆる偶有を実体から分離する」ことに言及し、それが例え「私には、実体的性質と表現される」としても、「それ自体としては、偶有を通じて以外には規定され得ない」としている(XXVIII 511)。

この問題構制では、しばしば形相或いは個体の生成消滅が問題外とされる。例えばニュートン力学の影響を重視する Friedman 2000は、Longuenesse の著書に対する啓発的なコメントの中で、カントは個体の生成消滅を主張できないと論じている。Friedman によると、アリストテレス的な意味での変化は、個の実体の生成消滅と、物質の偶有の変化という、二つの本質的に異なるタイプがあるが、「カントの第一類推の論点(その後、B版第二類推の冒頭で繰り返される)は、第二のタイプの変化のみが可能であるということであり、物質それ自体は発生も消滅もしないので、自然種の個々の構成要素と異なり、すべての時間を通じて絶対的に不変である」(Friedman 2000: 208)。

Friedman は、この物質理解がカントへのニュートン力学の影響を表しているという。つまり、ニュートン力学の基本的な新しさは、自然(特に生物)の模倣を拒否して、自然がそれに従って構成されているところの論理をアプリアリに用意している点にある。認識主観は主体的に科学的論理を投げ込み、それに基づいて自然に「質問」する。これが結局のところ個体とその属する類という自然種を模写した古典論理学の前提を破壊したというのである。

Friedman はニュートン力学の問題性を指摘している点では正しい。しかし、第一類推が——例え質点としての個体と空間の無限分割性の問題を解決したとしても——「実体の生成と消滅」の可能性を捨てざるを得ないという解釈は誤りである。ニュートンの物質概念に基づけば、木も灰もひとしなみに同じ物質である。或る人間が生まれ、死ぬということ、形あるものがその形を変え、ついには滅びるということが、ここでは、生まれも死にもしない物質とその規定の交替であるということになってしまう。相対的持続にしても、或るものの生起と消滅は、その実体の生と死ではなく、その背後にずれていき、本来的な基体の変化として捉えられるほかない。しかし、このように死を忘却し、個々の実体の生成と消滅を論じることのない自然科学が、新たな誤謬に陥っているとは言えないだろうか。絶対的持続は限界概念でしかない。カントは「実体の生成と消滅」を「実際に存在する仕方」に注目することによって確保した上で、まさにこの実際に存在することの時間性があらゆる実体性のカテゴリーの適用を制約していることを通じて、自然科学をもっぱら物理主義的に把握することへの批判を行っていたのである。

参考文献

- カントの引用は注記ない限り『純粋理性批判』であり、慣例に従って第一版をA、第二版をBと略述した。その他カントの著作についても、アカデミー版の巻数・ページ数を付した。また原文のゲシュペルト体は下線で示し、著者による引用と本文の強調は傍点で示す。著者の補足は[]で表し、…は省略を表す。
- Addis, Laird Clark. 1963: "Kant's First Analogy", *Kant Studien* 54(1-4), 237-242.
- Friedman, Michael. 2000: "Logical Form and the Order of Nature: Comments on Beatrice Longuenesse's Kant and the Capacity to Judge", in *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 82(2), 202-215.
- Guyer, Paul. 1987: *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge University Press.
- Hahmann, Andree. 2009: *Kritische Metaphysik der Substanz, Kant im Widerspruch zu Leibniz*, Walter de Gruyter.
- Hall, Bryan. 2011: "A Dilemma for Kant's Theory of Substance", *British Journal for the History of Philosophy*, 19: 1, 79-109.
- Jankowiak, Tim. 2013: "Kant's Argument for the Principle of Intensive Magnitudes", *Kantian Review*, 18, 387-412.

Longuenesse, Béatrice. 2005: *Kant on the Human Standpoint*, Cambridge University Press.

Watkins, Eric. 1997: "Kant's Third Analogy of Experience", *Kant Studien* 88 (4), 406-441.

犬竹正幸 2019: 「批判哲学の成立におけるカント力学論の意義」人文・自然・人間科学研究42、拓殖大学、1-17頁。

嶋崎太一 2014: 「物質はsubstantia phaenomena である」—カントの自然科学論における実体の問題—『日本カント研究』15、日本カント協会、162-176頁。

増山浩人 2015: 『カントの世界論』北海道大学出版会。